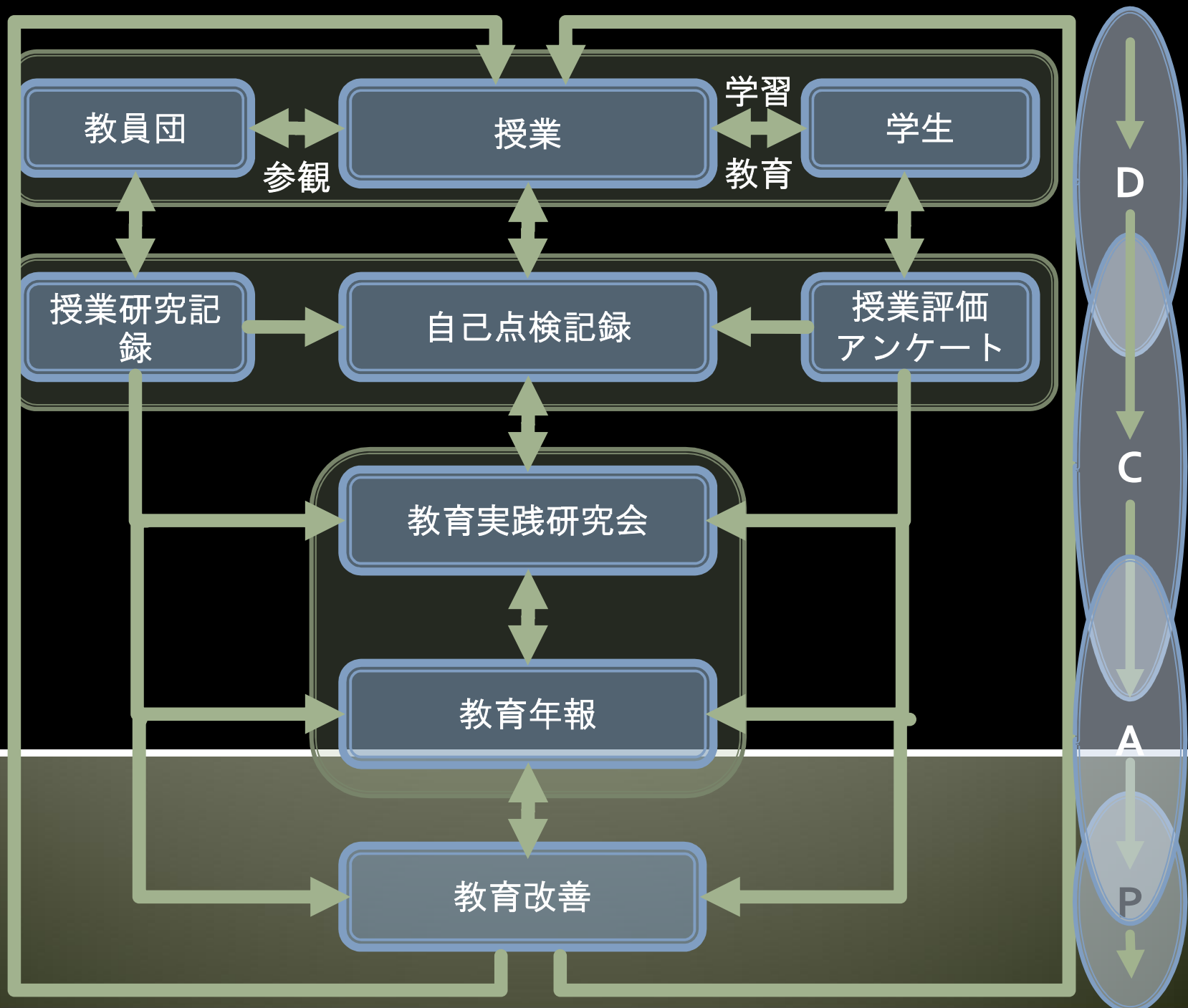


全学教務委員会・FD委員会・授業改善PT・皆川 勝

FD委員会中間報告第2回

メンバー

- FD委員会：
 - 皆川 勝 (工学部都市工学科)
 - 中村正人 (知識工学部自然科学系)
 - 井上 健 (知識工学部教職課程)
 - 田中康寛 (工学部機械システム工学科)
 - 岡野好伸 (知識工学部情報ネットワーク工学科)
 - 大塚善樹 (環境情報学部環境情報学科)
- 授業改善PT：
 - 皆川 勝 (工学部都市工学科)
 - 中村正人 (知識工学部自然科学系)
 - 岩崎敬道 (知識工学部教職課程)
 - 大上 浩 (工学部機械工学科)



FDのサイクルにおける 各施策の位置づけ

- 授業評価アンケート、授業公開、教育実践研究会、教育年報の位置づけ
- 授業の実施→授業の評価→改善の検討→改善案実施というPDCAサイクル
- 三つのPDCA
 - 教員自らが自己完結型でPDCAのサイクル
 - 学科等の教員団によるPDCAサイクル
 - 大学・学部レベルでのPDCAサイクル

教員の自己完結型のPDCAサイクル

- 学生はより良い授業を受ける権利を持つ
- 教員はより良い授業をしたい欲望を持つ
- 他者に指摘されるのを待つのではなく、プロフェッショナルとして本来の使命を果たすべく努力をするべき
- 学生の授業評価はそのための一データ
- 教員業績評価もはじまることから、そのPDCAのプロセスを記録として残す意義は大

教員団によるPDCAサイクル

- 教育はシステムであり、個別の教育の集合体として機能しなくてはならない。
- プロフェッショナルによる研究・評価が教育を良くするのに有効。授業研究（参観、参加）
- 相互の批判により教育は全体としてよくなる。
- 教育プログラムの認定にも直結する。証拠の蓄積が必要。

大学・学部レベルのPDCAサイクル

- 大学・学部レベルでの、ある程度の具体性を持った理念の下で、教育システムは展開される。
- 理念のもとに新しい教育システムが導入されることもある。
- 学科を超える規模での改善には、それより小さい規模でのPDCAサイクルにより得られる知見は有用。（個別事例の一般化）

自己点検記録の推奨や情報共有

- × 授業評価アンケートは、授業の自己点検のデータ。
- × 他の教員による批判・研究も、自己点検のデータ。
- × これらを踏まえて、プロフェッショナルとしての教員は自己点検し、それを教育改善に結びつける。
- × その結果は、他の教員にも有益な情報であり、学生への説明責任を果たすことにもつながる。

教育実践研究会の意義

- ✕ 教員の授業力を高めるために始まった。
 - 教育実践の提示を通じて、成功例等の情報の共有化を図った。
 - 参加する個々の教員がそれぞれの教育現場で生かしてきた。（検証されていないが）
 - 発表内容は発表者により教育年報に投稿されており、欠席者もその概要を知ることができた。
 - 教務委員会は、そのフォローアップをした。

これまでの教育実践研究会

- 当初は個々の教員の授業テクニックの改善が中心
- その後、内容にかかわるトピックに変化
 - 特徴のある教育，成功例提示，課題提示
- 近年は，学力低下とそれへの対応など
- 発表内容は個別の取り組み中心であり，そのフィードバックも個々の教員にゆだねられてきた。
- 発表内容にかかわる分析が行われなかった。
個々の事例から一般化・抽象化されず，全体の取り組みにまで至らなかった。

増えない参加者 活性化しない研究会

- 大学・学部・学科の理念・目標が曖昧。
- 目標のないところに改善はない。
- 授業の改善に興味がない，無関心である。
- 授業の改善に意欲はあるが、準備する時間的余裕、心理的余裕がない。
- 各々の部門の教員団が連携して教育改善する道筋が見えなかった。
- 共通教育と専門教育との接続性が悪く，他の部門の活動に関心がいかない。

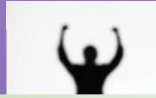
大学の理念・教育目標（霧の中？）

△△学部

〇〇学部の理念・教育目標（霧の中？）

教育実践研究会

理念・目標



成功！

理念・目標



びく
り！

理念・目標



悩み？

フィードバックは？

個別断片的！

基礎・共通教育

学部横断基礎・共通教育

中等・基礎・専門・大学院教育の連携

- 専門教育の内容・そこからの必要性に配慮した基礎共通教育
- 大学教育の基礎と成り得ていない中等教育の現状を見据え、共通教育と専門教育の確かな接続性を有する教育の必要性
- 基礎共通教育の成果を見据えた専門教育
- 学部教育の成果に連なる大学院修士教育
- 教員団によるPDCAサイクル確立の必要性

たとえば，工学系学科のカリキュラム

- 工学基礎・知識工学基礎で物理・数学必修
- 高校の物理と大学の物理の相違は何か。
- 共通教育としての物理学の内容・方法について専門との連携は取られているか。
- 専門の力学系科目では，物理学の教育学習成果を反映しているか。
- 創成教育，エンジニアリングデザイン教育，卒論等の創造性・総合化学習へそれまでの学習教育成果は生かされているか。

悲観的に見れば

- 学生の学力低下も原因だが，大学の物理は高校の物理の復習に多大な時間が必要。
- 共通教育と専門教育との連携はない。
- 専門の力学系科目では，物理学の教育学習成果を無視。
- 創造性・総合化学習へそれまでの学習教育成果は生かされているかの確認がされない。

ではないか？？？

学部・学科の教育・人材育成の理念は明確か

- 学部の教育理念が明確化されているか。
- 学修要覧等に時の学部長がそれらしきことを書いているが、個人的見解ではないか。
- 学部の理念のないところに、各学科がバラバラにやっている。
- 学科の理念のないところで、各教員がバラバラにやっている。

のではないか???

必要なアクション1： 理念・目標の明確化

- 本学の教育理念は何か。あるのか？
- 各学部・学科はそれぞれの教育理念とそれに基づく人間像を明確にする。
- それらの理念および人間像は，カリキュラムに反映される必要がある。
- 学部または学科としての標準的達成目標および，最低限の達成目標を具体的に明示する。

Standard and Minimum Requirement

必要なアクション2：

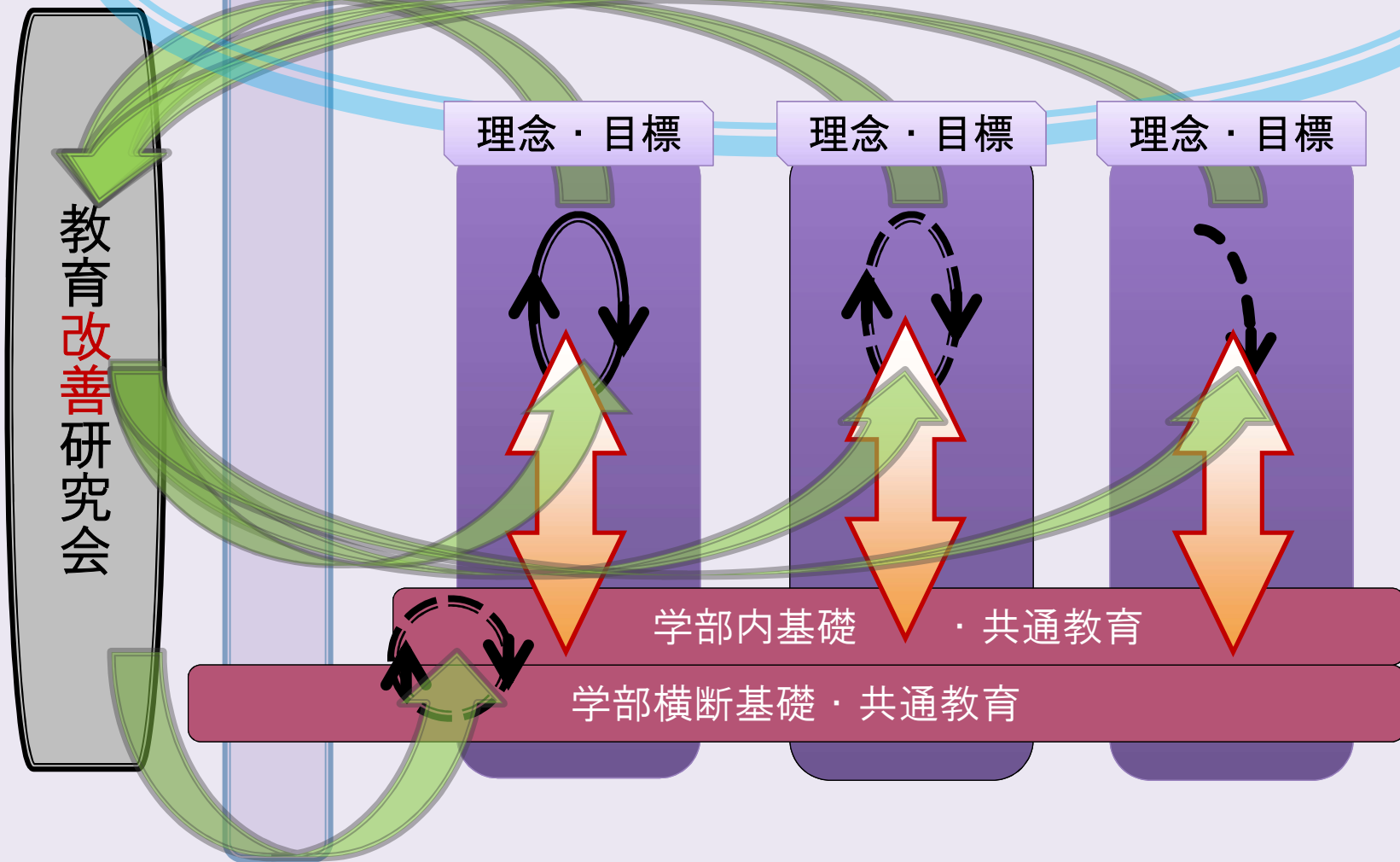
学科カリキュラムの改善

- 教育実践研究会を教育改善研究会に
- 個別学科の教育目標に基づく教育の達成度点検，課題明確化・共有化・分析
- 数度の研究会を実施したのち，課題を整理・分析し，必要に応じて，学科・学部の教育内容，方法に反映させる。
- 主催は全学教務委員会・FD委員会とし，継続的な点検活動の推進役となる。
- 最低でも年数回の教育改善研究会を開催。

大学の理念・教育目標

△△学部

〇〇学部の理念・教育目標



今後の進め方

- 学科等は，課題や成果を，主たるテーマおよびそのカリキュラム上の位置づけを念頭に，研究会で発表する。
- 発表をすること自体，成果を生む
- 発表と討議により，一般化・抽象化の成果が，網をかけるように他の組織を含めて，フィードバックされる。
- 当面，授業改善PTが担当するが，近い将来，各学科に教育改善担当を置きたい。

教育年報の実情

- ✖ 教育にかかわる施策の提言、実践の紹介が主
- ✖ 投稿者は学内の教職員が原則（学外者の投稿希望もあったが原則として認めていない）
- ✖ 教育論文としての位置づけは与えていないが、教育報奨の選定の際に参考にされた。（論文としてではなく、あくまで実践の内容確認）
- ✖ 記録としての意義はある。情報共有の結果が生かされているか明確にはわかりにくい。

教育年報に含む内容

- × 方針、提言（役職者）
- × 教育実践・失敗の記録
- × 教員自身の自己点検・課題提起
- × 教育改善の記録（前年度の教育年報、教育実践の総括と明確に対応付ける）：各教務委員会
- × 教育改善研究会の成果報告
- × 教員団の自己点検・課題提起：学科
- × 教員による他の教員の授業研究結果
- × 学生による授業評価・改善要求

教育年報の編集方法

- 主体は、各学部教務委員会合同の編集WG
- 教務課での編集はおおむね従来通りでよし。
- 発行時期は、従来通りの年度末でよし。
- ウェブ掲載を実施する。（学内のみ閲覧）
- 全学教務委員会・FD委員会では、各号の内容を確認し、改善の必要が認められれば、全学教務委員会経由で改善要望を出す。

教育年報における論文評価しない

- 教育論文を、ある種の審査を経て、掲載し、教育評価に反映することは、慎重に継続検討する。現段階では実施を提案しない。
- 教育論文の投稿機会は公に用意されている。
- 審査をできる者の数は限られ、その質を保証できるか？
- いわゆる研究論文の代わりに、年報への大量投稿という事態が生じかねない。

授業改善アンケートの現状

- 各学部で項目を決定し、頻度も学部ごとで決めて実施している。
- 一部の学科では自主的に学生に公開している。
- 結果が授業改善にどのように生かされているのかが明確には分らない。

教職課程・井上健先生の調査結果

- 授業改善アンケートの実施は根付いたが、個人レベルでの努力はあるものの、組織的な授業改善、教育改革の取り組みの段階には至っていない。
- アンケートの結果が学生に報告されない。
- 学生はどう思っているのかを把握するため、「学生による授業評価」に関するアンケート実施。サンプルは両キャンパス計275名

「学生による授業評価」 に関するアンケート

- 真面目に授業評価しようとしている:78%
- いい加減に記入している学生がいる:78%
- マンネリに感じる:56%
- 意味に疑念を感じる:53%
- 適当に記入してしまうことがある:30%
- どう活用されているのか知りたい:80%
- 教員がどう受け止めているか知りたい:80%
- 公開するべき:72%
- 授業改善に役立っている:11%
- 学生の声を伝える貴重な機会である58%

意義を認める学生「認識群」と 認めない学生「非認識群」の相違

- 真剣に回答，適当に回答の割合に有意差なし。
- 認識群：アンケート結果が教員に伝わり，改善に役立つと信じているので，真剣に回答
- 非認識群：いい加減に回答している学生がいる，マンネリだと感じる傾向。学生への公表を望んでいる。

学生が考える重要な項目・重要でない項目

■ 重要な項目

- 教員が十分な準備と熱意で授業を行ったか(SC)
- 授業内容はよく理解できたか(SC)
- 講義内容に興味を持てたか(YC)
- 授業は有益だったか(YC)

■ 重要でない項目

- 黒板やOHPを有効に使ったか
- シラバスに沿っているか
- 教室の大きさなどの環境, 教員の遅刻・補講
- 学生の態度に関わること

自由記述からわかること

- アンケートに答えても、結局、授業が改善されないのでは意味がない。(多くの意見)
- 学生は、**結果の公開と改善策の提示**を求めている。
- 結果が見えるようになることで、真剣にアンケートに回答するようになるだろう。
- **「授業評価が意味ある取り組みだと学生が実感できること」**が成功の鍵

授業改善アンケートの改革案

- 評価項目等は各学部ごとに見直していただき、全学教務委員会にて必要最低限の調整を図る。
- 施設や教育環境など、当該授業の質以外の項目が混入しないように。
- 教員の自己点検の一部として学内公開する。ウェブ入力を原則としたい。
- 自己点検書の記述はPDCAのサイクルが提示できるように配慮する。
- 調査は毎年を標準とする。
- 自由記述の公開については慎重に。

（関連）授業の成績評価の 実態調査の是非

- 授業の成績評価の実態も調査あるいは公表し、情報共有に努める必要がないか。（たとえば、学科による成績の分布の違い）
- 科目ごとの秀、優、良、可、不可の分布や、平均のグレードなど。
- 工学部と知識工学部ではGPAで成績順位評価

Teachers of the Year

- 目的は、教え育んでくれたと実感として思える教師に学生が感謝の意を表する。
- 授業改善/評価アンケートや教員業績評価と関連させない。
- 方法は学生の直接投票。
- 学生参加型の運営が望ましい。
- 選出単位, 評価基準, 受講学生数のばらつきに配慮必要。
- 教員業績評価の形が見えたところで, 学生部を中心に検討していただく。

教育に関わる優れた事業・取組に対する支援（未検討）

- テーマ設定や申請を支援する.
- 採択にならなかった取組をバックアップする.
- 教育実践研究会, 教育年報などを活用して, 取組に関する情報の発信, 共有に努める.

その他の未検討項目

- 公開授業
- 新たな教授法や教材開発ができる機会を制度化(サバティカルリーヴ, 国内留学, 研修等)

英語ウェブ教材の導入：中間報告

- × SCの外国語教室、専門英語担当者への業者プレゼンテーション終了、SCは教務委員会で検討中
- × YCでは、他者の教材を導入済み、独自システムも開発済み、ということで、ALCシステムを教材としないとの回答。
- × 等々カキャンパスに意向を打診中
- × SCのみの費用負担でも、導入する方向で働きかける。(といっても、全学生が使えるわけですが。)

初期費用および次年度以降の費用

- ハードウェア：2,079,000円（参考:ALC社）
- 初年次導入費用：630,000円
- 継続的な経費：コース当たり262,500円
 - TOEICコース（SC,YC,TC）
 - 技術英語コース（SC）